

平成 29 年度第 1 回香美市ものづくり会議
議事録（要約）

日時；平成 29 年 7 月 28 日（金）15：00～17：15

場所；香美市役所 5 階委員会室 3

出席者

委員；〔香美市商工会長〕寺村勉、〔香美市商工会事務局長〕吉村宏、〔香美市観光協会
長〕依光陽一郎、〔高知工科大学地域連携機構副機構長〕浜田正彦、〔高知工科大学
地域連携機構客員研究員〕村井亮介、〔山田高等学校長〕濱田久美子、〔NPO 法
人いなかみ〕近藤純次、〔株式会社山田ショッピングセンター代表取締役社長〕石
川靖、〔高知県地域産業振興監〕前田和彦

香美市；〔市長〕法光院晶一、〔教育長〕時久恵子、〔企画財政課長〕川田学、〔産業振興課
長〕西本恭久〔産業振興課班長〕中川英斉、〔産業振興課〕明石祐樹、〔定住推進
課長〕中山繁美、〔定住推進課班長〕松本理砂、〔定住推進課〕小松直人

（敬称略）

1. 開会（中山）

2. 市長挨拶

近年、日本の経済は厳しい状況におかれている。地域経済は不透明感があり、停滞感
をぬぐいきれない状況が続いている。人口減少を実感するようになり、新たな価値を創
造すること、ものづくりを大切にしなければならない。

先月、内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局の渡辺参事官がお越しになり、も
のづくりに関し意義深い話をし、励ましを受けた。地方創生は全国でたくさん取り組み
が行われており、優れた取り組みも多い。困難であっても地域の特性を活かした取り組
み、ものまねでない知恵を絞った取り組みが光っていると思う。

香美市はものづくりに長けた地域であり、ものづくりの歴史を持っている。様々な人
的資源にも恵まれていると思う。伝統産業もある、市内の工科大学や優良企業には先端
の技術・頭脳が存在している。

人口が減少する時代に入り、生産者・消費者にとって、ものづくりに付加をつけてい
くことが大切である。特許を目指す個人のネットワークもある。ものづくりにつながる
教育現場の取り組みもあり、成果も生まれており、今後が楽しみである。香美市はもの
づくりの可能性のあるまちである。香美市ものづくり会議がこれまでの準備会を通じ
て、地域の地場産業や起業に関する事、既存の企業の課題について話し合いを行って
きた。まずはこうした課題と向き合い、形にこだわることなく新たな取り組みをと考え

ている。

県産業振興計画は第 3 期を迎え充実を増している。香美市ものづくり会議の取り組みが進めば、様々な連携・協働が可能であり、新たな広がり生まれ、前進すると期待している。市民の皆様のアイデア、ものづくりを通じて悩んでいること、課題を会議で気軽に相談できるようになればと考えている。こういったところに発展の鍵が隠れているかもしれない。

この会議を活かしていくには、行政は縦割りではなく、横断的な機能を発揮しなければならないと考える。民間・行政・市民・研究機関が議論し、推進していくことに対する自由度を認めていかなければならない。会議の運用は大変であるが、夢のある新しいチャレンジである。元気な香美市を見据え、会議を最大限応援する決意である。まちの未来のため、次代のため、ともに頑張っていきたい。

3. 自己紹介

4. 議事

(1) 会長・副会長の選任について

会長；〔高知工科大学地域連携機構副機構長〕 浜田正彦

副会長；〔香美市商工会長〕 寺村勉

(2) 準備会の報告について

小松；準備会のまとめを報告

西本；「鍛冶屋の学校」創設プランについて説明

(3) 今後の取り組みについて

寺村；

「鍛冶屋の学校」については、計画書を県に提出され、学校をどこに造るかという話になっているようである。組合は須崎市・南国市・香美市の方で構成されており、人数的には香美市が多いので、香美市に造りたいが、無理な場合は南国市にという話が出ているようである。

鍛冶屋の学校の必要性には人材育成があるが、福井県のナイフビレッジは体験施設も備えたもので、カルチャーの要素も強い。個人的には、こうしたプロに習うことができる学校ができると、観光資源になり、また、家庭の刃物を研ぐことができれば、交流・文化の発信にもつながると思う。形としては香美市へという思いがある。

浜田；

単に学校を造ることではなく、地域づくりを含めて、南国市よりも香美市にということか。

寺村；

人づくりが大きい。新たな販路も皆が知恵を出し合いながら考えるなど、鍛冶屋を育てるだけではなく、周りも含めて、様々な要素があると思う。

前田；

県としても進めていければと考えるが、単なる箱物ではなく、ここを核とした人づくり・まちづくりへとつなげていくために、移住者を呼び込むことや工科大との連携など、ソフト部分を取り入れた形のものにしていかなければと考える。

寺村；

デザインを工科大で研究するなどの連携もあると思う。

浜田；

社会的価値が下がっていくことで廃れていってしまう。学校で研ぎを教えるだけでなく、価値や魅力を上げていくことが大事である。

濱田校長；

香美市の鍛冶屋に入っている研修生はいないか？

明石；

北海道からの研修生がいたが、親方の納得する技術までは届かず、中断した。研修の補助金は予算確保している。

市長；

この冊子作成は穂岐山刃物の社長が中心となっており、海外へ売っていくことを考えている。

親方と弟子の固定関係では厳しく、器用さも求められる。一方で、親方の負担もあり、弟子には補助金があるが、親方ではなく、1年2年の研修となるとハードルが高くなってしまう。学校なら教える側、教わる側の負担が少なくなることから、こうした案が出てきたと思う。

施設が先行するのではなく、この計画に対する地域やまちにとっての必要性が大事である。役割分担をはっきりとさせ、課題を明確にしていく必要があるが、この課題の明確化と解決については、ものづくり会議に期待している。

村井；

流通に関して、どれが土佐打ち刃物なのかが明確になっていない。ブランディングをしっかりとしていかなければならない。

自分の住んでいる所がノコギリ鍛冶屋跡で、今度、ノコギリ博物館になる。

寺村；

ものづくり会議で、学校のソフト部分を検討し、これを活かしていく作業が必要である。その機能が、この会の役割だと思う。

浜田；

どうやって持続的に産業として回していけるかを考える。現状のまま、議論もなく、

人をつくっていだけで解決するものではない。刃物組合では伝統工芸の認定証書を作っていると思うが、だれもどこも使っていない。伝統工芸としての制度があるので、それが分かるようにしていってもらいたい。

濱田校長；

鍛冶屋の学校には賛成だが、ブランディング・海外戦略は必要だと思う。渡世で技術を習い、その先の収入が見えない中で、続けていく人がいるのか。伝統工芸に価値を置き、ブランディングし、例えば芸術大学の出身者を対象にするなど、新たな価値を見出せるような大胆な仕組みが必要だと考える。従来のターゲットで鍛冶屋の伝統を受け継ぐだけの考えでは、後継者はできないのではないかな。

寺村；

土佐打ち刃物は、坂本龍馬の刀を作った刀鍛冶のものを受け継いでいるとの仮説を発信している途中であるが、こうしたブランディングに向けた取り組みを継続していくことも学校の中で養っていければと思う。

石川；

箱物を作るには立地やソフト面が大事で、自身の店の改装プランで、土佐山田でお店をするには打ち刃物とフラフで集客ができないかとの意見が出てくる。

県外や地域外から刃物の町としてイメージしたとき、どこに行けば刃物と接することができるのか、すぐに旗の立つ場所が思い浮かばない。その場としても鍛冶屋の学校が拠点になってもらいたい。

改装プランでは刃物とフラフのミュージアムショップがあり、それぞれの歴史が学べ、買い物ができる構想があった。

ヨーロッパではサービスエリアでナイフを売っており、大人になれば父から子どもにナイフを送る習慣がある。自分たちは刃物と接する機会が少なくなっているが、刃物を使う文化や、刃物の町ならではの習慣を発信し、消費するサイクルが生まれれば良いと思う。

村井；

製造者の売り先は香美市ではないので、鍛造がホームグラウンドになるようなまちづくりが必要と考える。

市長；

鍛冶屋の学校には心配も多いので、そこを明確にして解決につなげていかなければならない。

寺村；

ブランディングを明確にし、かっこよさがないと、若者は食いついてこない。ものづくり会議でブランディングの一端を担うことができるなら、伝統産業を後押しすることになっていく。

市長；

人が育つか、誰が育てるかを考えたとき、建物がなくても習う人が一箇所にとどまらず移動していくなど、組織で育てて行くやり方もあると思う。また、教える側への応援も必要で、農業や林業への支援を伝統産業分野に広げていくことが、市の産業振興の問題を解決する一つだと考える。

教育長；

今の子どもたちを見ていると、苦しいことから逃げる傾向があり、忍耐力が少ない。計画書を見ると、一所懸命頑張り、早く一人前になるというところが見えるので、ここを工夫できればと思う。きれいなものや芸術的なものに感動すると、ぜひやってみたいと思うので、「伝統を受け継いでやってみたい。あの打ち刃物を作ってみたい」と思えるようにもっていきたい。

村井；

まちをあげて国宝に臨むようなことがあっても面白い。

濱田校長；

ストーリーがブランディングになるので、メディアを使う。また、異業種の交流でのブランディング・イメージアップなどお金かけてやっていくことも大事。

スキルは専門家に習わなければならないが、これまでの肉体労働ではなく、例えば芸術的な新しいものを作っていくイメージを持った人を育てることも必要だと思う。

後継者をつくることだけ考えていては、その先の発展に心配がある。

近藤；

移住希望者には芸術思考の人が多い。

資料を見ていると刃物の売り上げは伸びているので、大量生産品は求められており、現場はそれへの対応を求められる。しかし、刃物づくりにあこがれる人は良いものを作りたいと思っているので、ミスマッチが生じている。

この会議では、とても良い意見が出ているが、色々な意見が出すぎて何をすればよいか分からない。課題や目的が明確であれば、それに対して何が必要か見えやすいと思う。

浜田；

今回は意見を出す場とし、その中で必要なものを見つけていきたい。

前田；

文化と産業でまったく違うので、コンセプトをはっきりさせなければならない。

中川；

議会の産業建設委員会で福井県の武生ナイフビレッジへ視察に行った。ナイフビレッジは25年ほど前に40軒ほどの鍛冶屋のうち11軒が集まり新たな組合を作り、自己資金で工場を建てた。当時の中心人物であった現理事長は「どこへ売るか、ビジネスが一番でないと後継者はできない。ただし、ビジネスに偏りすぎると、本来の伝統工芸・ブランド力が落ちるので、皆が伝統工芸士の資格を取っている。学校なので技術は当然

教えるが、ブランディングや打ち刃物の歴史も学び、自分たちが打ち刃物の価値に気づくようなカリキュラムにしている。」と言っていた。

海外のバイヤーとも商業的な取引をしている。組合員の年齢層は60代。施設は見学・体験ができ、年間500人ほどが体験に来ている。自分たちで営業努力をしながら、後継者を会社で雇い、ナイフビレッジへ勉強に出している。

濱田校長；

鍛冶屋の学校のプランでは、年間5人の育成を考えており、毎年5人ずつ増えていくことになるが、受入先があるのか。その後、ビジネスとしてやっていけるのか。

吉村；

現状の従業者の年齢構成をみると、5人/年でも妥当性はある。後継者を雇用にするのか起業にするのか、組合がどのように考えているか話し合いが必要である。

中山；

ふるさと納税の返礼品では、黒打ち舟行の包丁が1位となっている。西山商会から出しているが、生産が追いつかず、ZAKURIからも出してもらっている。TVなどのマスコミも使ってアピールしている。

また、フラフについても、先日、3業者に依頼し、返礼品として出していただくようにしている。文化・産業の両面で、県外や海外の方に広がっていけばと考えている。

今年は、公共施設でフラフを掲げたが、来年度はセレネ広場にも大きいフラフを掲げ、観光客にPRしていく。

濱田校長；

鍛冶屋の学校の検討委員には香美市の人が多いが、包丁に関する後継者が欲しい中で、包丁の講師は須崎市の人がほとんどである。香美市で包丁の講師はいないのか。

西本；

香美市は農山林刃物がほとんどである。学校の講師で、香美市で包丁を教える人は1名である。

浜田；

後継者育成も含めて、土佐打ち刃物の拠点が香美市であるという考えもある。

市長；

そのあたりも含めて、香美市として鍛冶屋の学校に合意できるかどうか、難しいところである。

前田；

まちづくり・ひとづくりを踏まえての議論が必要。

依光；

鍛冶屋の学校については引き続き進めていってもらいたい。

定住推進には雇用が必要である。刃物の件とは別に、今後の取り組みとして、食品産業についても取り上げてもらいたい。

浜田；

鍛冶屋の学校についての議論となったが、ソフト面をきちんとしていかなければならないなど、課題も多い。

土佐打ち刃物に関しては、今やらなければならないので、動きのとりやすい分科会を作りたい。

市長；

今日の話し合いの中で、疑問や課題が出てきた。心配事が整理され、説明できるようになれば、早い段階で行政としても表明していくつもりだが、今ある制度の活用や役割分担を含め考えていく。

浜田；

今日の話を整理し、寺村・浜田・前田・濱田の4名で行政とすり合わせをし、その次に鍛冶屋の学校に関わる人と話をしていく。整理ができた早い段階で、ものづくり会議を開催する。

寺村；

ものづくり会議の役割として、「鍛冶屋の学校が議題にあがった→課題を洗い出す→関わる人と合意のうえで進めていく」とのやり方が良いと思う。

浜田；

具体的に動き出したものを、我々も意見を反映していきたい。

市長；

ものづくり会議の中で進めていきたい。新しく起こったことについても、行政としてはルールをはずしてでもやっていきたいと考える。議会に対しても、ものづくり会議での意見は相当尊重してもらいたいと思っている。

(4) その他

なし

5. 閉会